

# 終助詞的用法からみる 「のだから」の意味

—産出のための理解を目指して

中村紗弥子

## ◆要旨

「のだから」には、ある情報下において対照的な捉え方や認識を持った二者の間で、一方がもう一方の認識を否定し改めるよう働きかける機能がある。それは、話し手が自分の認識と聞き手のそれとが対立するものだという事を聞き手に示すことであり、そこに「対立の存在の明示化」という「のだから」固有の意味領域が存在する。その明示化は、話し手にとって疑念の余地がなく当然の認識に基づくため、聞き手に対してある種非難ともとれる含みを持っていることが多い。そのため学習者は、誤って単純な理由の述べたてに用いてしまうと、唐突に何かを否定されたような印象や押しつけがましさを聞き手に与えてしまう表現であると理解しておく必要がある。

## ◆キーワード

終助詞的用法、固有の意味領域、当然の認識、対立の存在の明示化、産出のための理解

## ◆ABSTRACT

*Nodakara* has a function to indicate that there is a contrastive recognition between the speaker and the hearer and that the former tries to deny and renew the recognition of the latter. It shows to the hearer that his/her recognition is the contrary to that of the speaker, and there exists a peculiar semantic domain of *Nodakara*. That clarification has, in many cases, a connotation that the speaker criticizes the hearer because it is based a natural recognition in the discourse domain. It is necessary, therefore, for the learner of Japanese to keep in mind that *Nodakara* used to show simply a reason mistakenly conveys an impression to the hearer that his/her opinion is abruptly denied or a sort of pushiness.

## ◆KEY WORDS

sentence-final usages, peculiar semantic domain, natural recognitions, clarification of the existence of opposition, better understanding for production

The Meaning of *Nodakara* with Special  
Reference to Sentence-final Usages  
Toward a better understanding for production  
SAYAKO NAKAMURA

## 1 はじめに

非母語話者との会話の中では、言語を問わず表現の誤用に遭遇するものである。日本語についても同様で、時としてその誤用を出発点に日本語教育における文法の提示方法、教授方法を見直す機会に繋がることもある。言語使用の目的を「コミュニケーションの達成」とするならば、どの程度まで誤用を訂正する必要があるのか議論の余地があるが、少なくともそこにマイナスの印象が生まれてしまう場合はそれを取り除く必要がある。

本稿で扱う「のだから」もその1つである。一般的には、学習を重ねることで減少する誤用の方が多いように感じられるが、この表現に関しては初級から超級まで学習者のレベルを問わず、むしろ学習時間が長いほど間違った使い方が目立つ。例えば下記の(1)は過去に650時間以上学習経験があり、かつ日本滞在経験のある学習者、(2)は日本の大学院に所属する留学生の誤用である。

- (1) \*日本語を忘れないように日本人と話したいのですから、イベントに参加させていただけないでしょうか。 (学習者からのメール)
- (2) (学校にくと必ずBさんに話しかけるAさんが、今日はそうでない)  
私「どうして話しかけなかったの。」  
A「\*疲れてると思ったんだから、話しかけなかったんです。」 (実例)

これらは「のだから」を「から」「ので」「~のだ。だから…」と同じ類の表現として捉えていることから生まれる誤用である。教育現場では、「のだ」は説明や強調の表現、また「から」は理由を述べる表現として主に扱われているが、「のだから」についての理解は学習者に委ねられているのが現状で、「のだから」が「のだ」と「から」の持つ意味を単純に組み合わせただけの表現ではないことを、教師が特に言及する機会もない。使用頻度の低さから、あえて教育現場では取り上げられることのない表現ではあるが、一方で間違った使い方をした場合、聞き手にはある種の「押しつけがましさ」という違和感を与えてしまう表現でもあるため、「のだから」が持つニュアンスを正しく伝え誤用を

防ぐ必要は十分にある。

「のだから」の意味と特徴については、先行研究で既にさまざまな言及がある。そこでは「のだから」に伴ういくつかの語用論的特徴や現象が取り上げられており、その表現をより突き詰めて理解する上では非常に重要な議論ばかりであるが、一方で、学習者が正しく使うための理解を目指す場合、それらの議論に則って説明するのは少々複雑すぎて逆効果である。本稿では、学習者の「産出」を目的として「のだから」の意味を整理し、教育現場においてよりシンプルに、かつ中核的な意味やニュアンスを的確に捉えた説明ができるよう試みた。

## 2 考察対象と本稿の立場

ここで本稿の考察対象と立場を明確にしておく。先行研究では、次の(3)のような「P(前件)のだからQ(後件)」という前件・後件に挟まれた従属節の「のだから」に焦点を当てた議論が主である。冒頭であげた学習者の誤用も従属節である。

- (3) (麻痺で身体感覚がなく火傷してしまった)  
常滑 「自分のせいだからさ。ちょっと煙草吸ってるうちにコーヒーカップが倒れてたんだな。」  
ミドリ「感覚ないんだから、暑いモノは注意しないと駄目なのよ。」  
(映画『AIKI』より)

他方、(4)のような「のだから」で終結する形は、従属節の延長線上で議論に取り上げられるのが一般的である。

- (4) (ある医者の病院に友人が遊びにきて長い時間油を売っている)  
医者「診察の邪魔だよ。」  
友人「いいじゃない。どうせ患者さんなんていないんだから。」  
(ドラマ『ひとつ屋根の下』より)

先行研究ではこの(4)のような形について、従属節の倒置や省略と捉えられるものと、派生的な用法として終助詞的に使われているものとがあるとされているが、ここではそれら全ての言いさし文を広く終助詞的用法と呼ぶことにする。

(3)のような従属節の「のだから」に注目し、その意味や特徴を整理すると、前件や後件についての制約などが議論の中心になり、話が少々複雑になる。「産出」を目的として整理するならば、「のだから」を使うことで発話にどのようなニュアンスが生まれるのか、どのような場面で使う表現なのか、よりシンプルにまとめるための情報が必要である。そこで、本稿ではあえて従属節ではなく、まずは(4)のような終助詞的用法を考察対象として「のだから」の意味について考えることにする。

終助詞的用法に注目する理由の1つは、終助詞的用法の用例を見ることで、まずはそこに含まれているモーダルな意味に注目して考えることができるからである。従属節の用例から議論を始めると、文の形、派生する表現の特徴、前件・後件の制約などにどうしても注意が向いてしまうが、終助詞的用法に注目することで、「のだから」にどのような意味やニュアンスが含まれるかという少し違った角度から議論を始めることができる。

またもう1つの理由としては、終助詞的用法がある一定の意味領域を持っていると考えられるためである。次の表は、下記のシナリオ集の中に見られる「のだから」「から」「ので」の用例数を並べて比較したものである。

表1 シナリオ集の中の「のだから」「から」「ので」の用例数比較

	従属節	終助詞的用法	全体数
のだから	45	102	147
から	306	485	791
ので	68	30	98

本稿の主な用例の出典である『'02年鑑代表シナリオ集』『'03年鑑代表シナリオ集』『'04年鑑代表シナリオ集』(シナリオ作家協会年鑑代表シナリオ集編纂委員会編)では23作品で「のだから」の用例が147例、そのうち102例が終助詞的用法で

約7割を占めていた。同作品中の「から」「ので」に関する数字も表1の通りで、それぞれの終助詞的用法が占める割合は、「から」が791例中485例で約6割、「ので」は98例中30例で約3割であった。「から」が終助詞的用法を含めて全体数で見ても圧倒的な使用数を持っていることは明らかであるが、「のだから」もその中で一定の使用数を持っている。特に終助詞的用法については十分な使用数があり、固有の意味領域を持つと考えることができる。

以上の理由から、本稿では学習者にとって「産出するための理解」が得られることを念頭に置き、終助詞的用法を考察対象の中心に据えることで、「のだから」の使用によって発話にどのようなニュアンスが生まれるか、またそれゆえにどのような場面で使う表現なのかをよりシンプルな形で整理したい。

### 3 先行研究

先にも述べた通り、「のだから」については既にさまざまな議論があり、それは主に従属節の「のだから」を考察対象とした議論である。本稿でも本題に入る前に基本的な性質についてまず確認しておきたい。

議論にはさまざまあるが、ここでは紙幅の都合上「のだから」のニュアンスや含みに関わる主な3点について確認しておきたい。まず指摘されているのは「PのだからQ」の前件Pと後件Qに関する制約で、PやQに置かれる表現や事柄の内容に特徴があるという点である。次の(5)(6)を例に見てみたい。

(5) = (3) (麻痺で身体感覚がなく火傷をしてしまった)

常滑 「自分のせいだからさ。ちょっと煙草吸ってるうちにコーヒーカップが倒れてたんだな。」

ミドリ 「感覚ないんだから、暑いモノは注意しないと駄目なのよ。」

(映画『AIKI』より)

(6) (別荘を売ると言い出した母早苗に子どもが反発する)

健太郎 「何それ、そんな話、聞いてないよ。」

早苗 「聞くも聞かないもありません。私の財産なんですから、私の好きにします。」

(映画『笑う蛙』より)

前件Pについてそれぞれの例を見てみると、「のだから」で提示されている(5)「感覚(が)ない」や(6)「私の財産である」という情報は、それぞれ聞き手が既に知っている情報である。このように、話し手だけが所有している情報ではなく、聞き手にとって既知の情報が前件Pで再提示されることが多いと田野村(1990)や野田(1995,1997)で指摘されている。

また同先行研究において、後件Qについても、単なる事実の述べたてではなく、聞き手に対する言い聞かせや自己主張など話し手の判断や命令に関わる表現が多いとの言及がある。(5)「熱いモノは注意しないと駄目なのよ」や(6)「私の好きにします」がそれであるが、これについては「のだから」に判断の根拠を表す「から」の性質が引き継がれているためとされている。

3点目として、これら2点の特徴から生まれる含みについても前述した先行研究で指摘がある。例えば(5)の念を押して言い聞かせるようなミドロの発話からは、「あなたは、感覚がないということをまだ十分認識していない」と非難するようなニュアンスが含まれていることが分かる。また、(6)では自分の意見に反対する子どもたちに反発する強い姿勢が感じられる。桑原(2003)では、「のだから」が「話し手と聞き手の間に判断・立場の対立があって、話し手がそれを明確に意識して、聞き手に対して同意・同調することを強く求める場面」で使用される表現であり、話し手の一方的な姿勢を感じさせるものであることが指摘されている。このような発話全体が帯びるニュアンスについても「のだから」が持つ特徴の1つとして先行研究でその特異性が指摘されている。

## 4 終助詞的用法の「のだから」

先行研究の内容を確認したところで、終助詞的用法についての考察に移りたい。終助詞的用法の用例を見てみると、聞き手が存在し発話が直接そちらに向けられているものとは別に、自分自身に言い聞かせるような独り言としての発話がある。例えば次の(7)や(8)のようなものである。

- (7) (無邪気な夫を遠くから見つめる妻)  
もう、子どもんだから。(実例)

- (8) (アイドルになるのは無理だと言われた女の子)  
私、ぜ〜ったいアイドルになるんだから。(ドラマのセリフより)

「のだから」の意味を詳細に記述するためには、聞き手が存在する用例だけでなく、このような独り言の中で使われる「のだから」についても合わせて議論する必要があるが、本稿ではあくまで学習者の「産出」のための整理を目的としているため、それらは除き、以下本節からの考察では聞き手に向けられる「のだから」に限って扱うことにする。

### 4.1 聞き手に向けられる「のだから」

聞き手に向けられる「のだから」の用例としては、次のようなものがある。

- (9) = (4) (ある医者 of 病院に友人が遊びにきて長い時間油を売っている)  
医者「診察の邪魔だよ。」  
友人「いいじゃない。どうせ患者さんなんていないんだから。」  
(ドラマ『ひとつ屋根の下』より)
- (10) (スーパーで光子が値引きされた食品をかごに入れると下川はそれを正価のものを取り換える)  
光子「いいじゃない、今日食べるんだから。」(映画『UNLOVED』より)

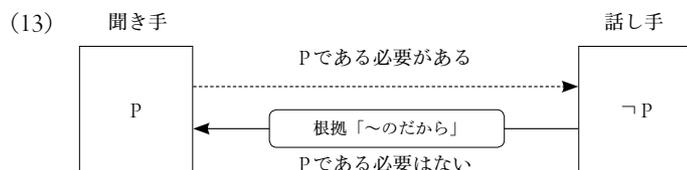
(9)では、診察の邪魔になるから早く帰れと急かす医者に、患者さんもないのに邪魔になるはずがないと友人が反発。「帰る必要がある」と考える医師に対して、友人は「帰らなくてもよい(帰る必要はない)」と反論していることが分かる。また(10)でも「正価の食品を買う必要がある」と考えて値引き食品と正価の食品を取り換える下川に対し、光子は「値引き食品でいい(正価で買う必要はない)」と下川の考えを改めようとしている。両例とも、聞き手が「〜である必要がある」と認識しているのに対して、話し手はその必要はないと考えており、その根拠(患者がいなかったり食品を今日食べるということ)を「のだから」で示すことによって、聞き手の認識を否定したり、それを改めるよう働きかけていることが分かる。次の(11)や(12)も同様である。

- (11) (離婚して娘と離れ離れになった父親が久しぶりに娘のミホと再会)  
 阪田「また会えるんだろ？ 今度、飯おごるよ。娘におごるって言い方もなんだけど。」  
 ミホ「無理じゃなくていいよ、失業者なんだから。」  
 (映画『ガールフレンド』より)

- (12) (中身の分からない積荷を運ぶ仕事を無事に終えた2人)  
 中村「それより、今日運んだ積み荷って何だったんです？」  
 渋谷「それは聞かない約束になってるからね。」  
 中村「やっぱり知らないんですか。」  
 渋谷「いいじゃないそんなの。金は通常の二倍貰えたんだから。どうせあんたも、金があるんだろ？」  
 (映画『東京原発』より)

(11) では、金銭的に厳しい状況にもかかわらず食事をご馳走したいと考える父親に対し、娘は父が失業者であるという事実を「のだから」で改めて提示することによってそんな必要はないと断っている。また(12)でも積荷の中身を知る必要があると考える中村に対して、渋谷は報酬が通常の二倍貰えたという事実をもう一度確認させ、中身を知ることよりもその事実の方が重要であると説得している。

このように、以上の用例はすべて、何らかの必要性を感じている一方に対し、その必要はないと考えるもう一方が、その根拠を「のだから」で提示することによって相手の感じている必要性を否定し、その認識を変えるよう働きかけているものだと考えられる。そこには発話の前提として、話し手と聞き手の間にある事柄に対する捉え方の相違が存在し、次の(13)のように説明することができる。(¬は否定を表す。)



(9) を例に見てみると、診察室に長時間友人がいるという状況下で、医師は「邪魔である(帰る必要がある)」(P)、友人は「邪魔ではない(帰る必要はない)」(¬P) と異なる捉え方をしており、Pと¬Pという両者の対立する認識が発話の前提にある。その上で「診察の邪魔だ」という医師の発話、つまり「あなたは帰る必要がある」という医師からのシグナル(点線矢印)に対し、友人はその必要がないと考える根拠(患者さんがいないということ)を「のだから」で提示し反論している。また(10)も同様に、食品を選ぶ下川と光子には、下川は「正価の食品がいい(正価で買う必要がある)」(P)、光子は「値引き食品でいい(正価で買う必要はない)」(¬P) という対立の認識が存在する。値引きされた食品と正価の食品を取り換えるという下川の行動、すなわち下川からの「正価で買う必要がある」というシグナルに対し、光子はそう思わない根拠(今日食べるということ)を「のだから」で示している。このように、話し手は聞き手とは対立する認識を持っているということを示している。このように、話し手は聞き手とは対立する認識を持っているということを示している。同時に聞き手の持つ認識を否定し、それを改めるように働きかけていると考えられる。

さて一方で、これまでの用例とは少し異なる説明を必要とするものが次の(14)(15)のような用例である。これらはいずれも「のだから」の話し手が何らかの行為を行っている際に、聞き手の行為によって邪魔される場面でのやりとりである。

- (14) (車を運転している恒夫に自分の方を向くようせがむジョゼ)  
 ジョゼ「見て見て！ こんな色、変わる！！」  
 恒夫 「うん」  
 ジョゼ「見てて！ なあ！」  
 恒夫 「あのね、運転してんだからさ。」  
 (映画『ジョゼと虎と魚たち』より)

- (15) (考え事をしている津田に泉が横やりをいれる)  
 泉 「ね、どうして及川さんのこと気にしてるの？」  
 津田「話しかけないでください！ 今考えてるんですから…」  
 (映画『東京原発』より)

(14) は運転中にもかかわらず自分の方を向かせようとしているジョゼに対して、また (15) は考え事をしている最中に話しかけてくる泉に対して、それぞれ話し手が「邪魔するな」と訴えている。すなわちこれらの「のだから」文は、聞き手からの邪魔な行為に反応し、話し手がそれを禁止しようと聞き手に向けて発話されたものであると考えられる。次の (16) と (17) も同類とみられる用例である。

(16) (待ち合わせの時間を守れなかった藤野が怒る光子に弁解する)

藤野「勘弁してくれよ、仕事だったんだからさ。」(映画『UNLOVED』より)

(17) (明日仕事があるにもかかわらずまだお酒を飲もうとする守)

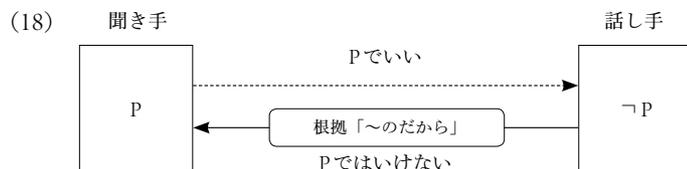
守 「俺はさあ、お爛もう一本！」

美紀子「もう、いい加減にして。明日早いんだから。」

(映画『さよなら、クロ』より)

(16) では、光子は待たされたことに腹を立て、怒って当然であると考えているが、一方藤野は仕事という正当な理由があり、光子が怒るのは間違っている、怒るべきではないと反論している。また (17) では、次の日の朝早くから仕事があるにもかかわらず、まだお酒を飲もうとする守を、美紀子がもう飲んではいけないと制している。

このように (14) ~ (17) の「のだから」による発話は、ある事柄について「~であっていい」と考える一方に対し、「そうあってはいけない」とその考えや行為を禁止するために聞き手に向けられていると考えることができる。次の (18) に示すように、このタイプも前述したタイプと同様、ある事柄について双方の捉え方や認識が対立していることが分かる。

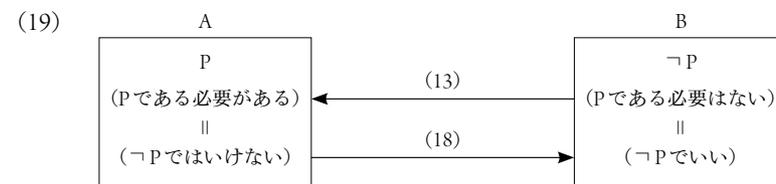


(14) (15) を例に見てみると、運転や考え事をしているという現状について、話し手は「話しかけないでほしい」( $\neg P$ ) と考えているわけだが、聞き手にとっては邪魔をしているという気はなく、当然「話しかけていい」( $P$ ) ものと捉えている。話しかけて気を引こうとする聞き手からのシグナルを受けて、邪魔であるとする話し手は、その根拠として「運転している」「考えている」という自分の現状を「のだから」で提示し相手の行為を止めようと働きかけている。また (16) でも同様に、時間に遅れ約束を守らなかったという事実について、光子は「当然怒っていい」( $P$ ) と捉え、一方藤野は「怒るべきではない」( $\neg P$ ) と捉えている。光子の怒った態度を受け、藤野は「仕事があった」という事実を「のだから」で示すことによって、遅れたのは仕方がないことであり怒るべきではないと光子の考えを改めようとしている。

ここまで、聞き手に向けられる終助詞的用法の「のだから」について大きく2つに分けて整理をした。一方は相手の感じている必要性を払拭する意味を持ち、またもう一方は相手の認識や行為を禁止する意味を持つが、両者とも「のだから」の機能としては、話し手が聞き手に対して対立する認識を持っていることを明示すると同時に、聞き手の持つ認識を改めるよう働きかける機能があると考えられる。

## 4.2 「のだから」の意味とその機能

さて、4.1では終助詞的用法の「のだから」の意味として、1つは相手の感じている必要性を払拭するもの、もう1つは相手の認識や行為を禁止するものとして整理したが、これらは対立する捉え方 ( $P$  と  $\neg P$ ) を持つ両者のどちらからどちらへ発話が向けられるかによって、前者の意味とも後者の意味ともなる。次の (19) に整理してみたい。



前述の(13)で示した「Pである必要がある」とはすなわち「 $\neg$ Pではない」ということ、また「Pである必要はない」は「 $\neg$ Pでいい」ということであり、(13)も(18)も話し手と聞き手の対立関係は同じものであるといえる。つまり(19)で示した通り、「のだから」の発話の前提に、同じ情報下で「Pである必要がある= $\neg$ Pではない」と認識するAと「Pである必要はない= $\neg$ Pでいい」と認識するBが存在し、Bが話し手となってAへ発話が向けられる場合、その「のだから」は(13)で示したように相手の感じている必要性を払拭する意味を持つことになる。また逆にAからBに発話が向けられる場合には、(18)で示したように禁止の意味を持つことになるのである。

このように、どちらが話し手になりどちらが聞き手になるかによって、「のだから」は異なる意味を表すが、いずれにしても「のだから」文の話し手は、発話によって聞き手との対立を明示し聞き手の認識を改めるよう働きかけているといえる。

### 4.3 「のだから」に含まれるニュアンス

最後に「のだから」文に含まれるニュアンスについて述べておきたい。先行研究でも指摘があった通り、ここまであげた用例はすべて「のだから」で提示される情報が聞き手にとって既知のものである。例えば、(9)「患者さんがいない」や(14)「運転している」などは、話し手、聞き手ともに目の前に共有している状況を改めて確認していることが分かる。

聞き手が既に知っている情報、つまりお互いが共有している情報を再度提示するということは、同じ情報を共有しているにもかかわらず自分とは異なる対立した認識を持っている聞き手に対して「どうしてそう考えるのか」「どうして自分のような捉え方ではないのか」という疑問とも非難とも似た気持ちが話し手の中にあるということである。また、話し手がそう考える前提には、話し手自身が自分の考えについて疑いを持たず、これが当然であると捉えていなければならない。つまり「のだから」の発話は、話し手が持っている疑念の余地なく定まった当然の認識に基づくものであり、それゆえに発話には非難ともとれるニュアンスが含まれることになると考えられる。

共有する情報を再提示した場合に含まれるこのニュアンスについては、藤城

(2010)で、「のだ」の「強調」と呼ばれる用法が、本来「認識のギャップ」があってはならないと想定される状況で聞き手に対して「十分に認識して重く受け取るべき事態を、あなたはちゃんと認識していない」という「認識のギャップ」への意識を示すことだと指摘されている点と通じ、「のだから」に「のだ」の「強調」という表現効果が引き継がれていると考えることができる。

一方、次の(20)～(22)のように聞き手にとって既知の情報ではなく新情報が提示される例もある。

- (20) (好きな男性に対して何でもしてあげたいという女性が)  
できるかじゃなくてやれでいいのよ。私は何でもライトの言いなりになるんだから。(映画『デスノート完結編』より)
- (21) (グルメリポーターが美味しいと評判のメンチカツを紹介する)  
これがね、普通の豚肉じゃないんだから。(グルメ番組より)
- (22) (手作りの料理を恋人にすすめる)  
これ私が作ったの。すごく美味しいんだから。(実例)

(20)の女性の発話には、口に出さずとも自分の聞き手に対する気持ちに気づいてほしかったという、ある種聞き手の鈍さを非難する気持ちが含まれている一方で、「私は何でも言いなりになるいい女である」というアピールや満足感のようなものが付加されていると読み取れる。また(21)のリポーターの発話や(22)の手料理を作った女性の発話は、「普通の豚肉じゃない」「すごく美味しい」という聞き手にとっての新情報を提示することで、目の前の料理が想像以上のものであり、聞き手である視聴者や恋人が認識している程度以上のものであることをアピールしている。

これらには相手を非難するニュアンスは含まれていないが、聞き手にとって既知の情報が提示された場合の「あなたは知らない」「分かっていない」というような含みが生きていることで、聞き手の関心をあおる話し手の姿勢がうかがえるものである。これは、藤城(2010)で、聞き手が事態を認識していないことが当然である場合には「あなたがこれを知らないことは分かっています。意外でしょうが、聞いてください」という「告白」「やわらげ」のような「のだ」

の用法があると指摘されている点と通じるものがある。

このように「のだから」で提示される事象は、話し手と聞き手が共有しているものである場合とそうでない場合とがあり、それによってニュアンスも多少異なることが分かる。これについては、前述した通り藤城 (2010) で聞き手が事態を認識している必要があるかそうでないかによって「のだ」は「強調」にもなり、また「告白」や「やわらげ」などと呼ばれる用法にもなると説明されている点からもうなずける。

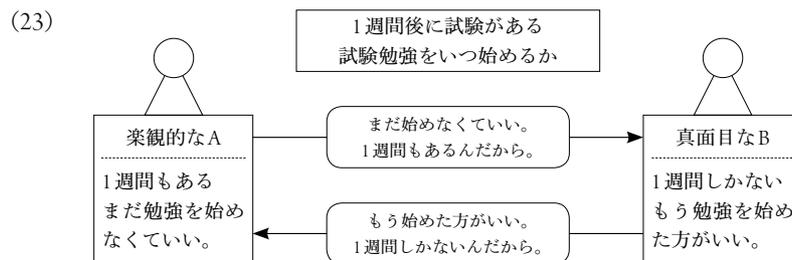
いずれにしても、「のだから」の発話に含まれるニュアンスは、話し手が自分の認識について疑念の余地なく当然のものであると捉えていることによって支えられているため、冒頭にあげた学習者の誤用のように「のだから」を単純な理由の述べたてに用いてしまうと、聞き手にとっては押しつけがましい印象が残り、違和感を与えてしまう点に注意しなければならない。

## 5 学習者への提示

以上ここまで聞き手に向けられる終助詞的用法を見ることで、「のだから」固有の意味領域について考えたが、本節ではそれをふまえた上で学習者への提示方法について整理したい。

「のだから」は、ある情報のもと対立する認識を持つ二者の間で用いられるべき表現であり、「のだから」の発話は、聞き手が感じている何らかの必要性を払拭したり、また相手の認識や行為を禁止したりする意味合いを持ち、それはつまり、話し手が自分の認識と聞き手のそれとが対立の存在であることを明示することになる。また、「のだから」の発話の多くには聞き手の認識について非難するようなニュアンスを伴い、その認識を改めるよう働きかける機能もある。これは話し手が自分の認識について疑念の余地がなく当然のものだと捉えていることに起因するものと考えられる。

学習者への提示としては、「対立の明示化」「当然の認識」の2点について分かりやすく説明ができ、また独特のニュアンスについても典型的な形で説明できるものがふさわしい。例えば次の (23) は本稿でこれまで述べた内容をふまえ、具体的なトピックを与えて作成した提示案である。



「1週間後に試験がある」という情報のもと「試験勉強をいつ始めるか」というトピックについて、楽観的なAは「まだ1週間もあるから始めなくても良い」、また真面目なBは「もう1週間しかないから始めた方がいい」と、時間の長さや試験勉強についての捉え方が対照的である。楽観的なAと真面目なBの両者の捉え方はそれぞれにとって当然のものであるというのが「のだから」の発話の前提であることをここで示す必要がある。

その上で、Aが話し手、Bが聞き手になる場合や、またその逆の場合について具体的な場面設定を行い、例文紹介をすることが必要である。例えば、1週間後に試験があると発表があり、その日早速勉強を始めようとするBに対し、Aがそんなに早く始める必要はないと説得する場合、次の (24) の発話が想定できる。また逆に、まだ余裕があると考え、遊びに行こうとするAをBが咎める場合には (25) のような発話になるだろう。

(24) A「え、Bさんもう勉強してるの？ まだ始めなくていいよ。1週間もあるんだから。」

(25) B「ちょっとAさん、遊ぶのはやめてもう始めた方がいいよ。1週間しかないんだから。」

このように、学習者には「のだから」を使うということが、何か特定のトピックに関するやりとりにおいて自分が相手とは対立する考えを持っているとはっきり示すことになるということ、またその考えは当然であって疑念の余地がないことから、相手の認識を否定しそれを改めるよう働きかける表現であること

を説明する必要がある。またそれゆえに誤って単純な理由の述べたてにこの表現を使ってしまうと聞き手に押しつけがましい印象や違和感を与えてしまうという点について特に注意する必要がある。

以上本稿では、聞き手に向けられる「のだから」に限って考察し、その典型的な意味や機能について産出のための理解を念頭に置いた整理を試みた。「のだから」の用例については本稿でも少しふれたように独り言として用いられる「のだから」などもあるが、学習者への提示、また産出を目的とした整理としては、このような典型的な場面設定や用例を示し理解を促すことが得策であると考え。

〈一橋大学〉

#### 参考文献

- 桑原文代 (2003) 「説得の「のだから」—「から」と比較して」『日本語教育』117, pp.63-72. 日本語教育学会
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I』和泉書院
- 野田春美 (1995) 「のだから」の特異性」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 pp.221-245. くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 藤城浩子 (2010) 「ノダの提示方法に関する一案—メタファーを用いた意味・機能提示」『日本語/日本語教育研究』1, pp.67-84. ココ出版